

資料・研究ノート

タイ国の教育と Dek Wat

——バンケム村の調査を中心として\*——

綾 部 恒 雄\*\*

Dek Wat and Thai Education

——A Case of Tambon Ban Khem——

by

Tsuneo AYABE

はじめに

近代教育体系が導入される以前のタイ国の教育は、周知のように、仏寺の比丘 (bhikkhu) たちの手によって行なわれていた。男の子は、早いものは5、6才になると、“寺の子”(デク・ワット dek wat) として寺に入り、僧の身の回りの世話をするかたわら、仏教のモラルや読み書き算数を bhikkhu から学ぶのが習わしであった。Dek wat は男子にのみ許されていたから、女子には、上記のような勉学の機会は与えられていなかった。

1898年に国家教育体制が採用され、1921年にはラマ六世によって義務教育令が布かれ、近代教育体制が次第に整備されるにしたがって、読み書き計算などの学習は、もっぱら学校でおこなわれるようになっていった。しかし、教育改革ののちも、dek wat は依然として寺に起居し、僧の手足となって働き、寺の機能を維持するにはなくてはならない存在である。Dek wat が寺で bhikkhu と寝食をともにしているということの意味は、近代学校教育が導入される以前と以後とでは、彼らの教育という点のみをとっても違いがあることは確かであろう。しかし dek wat が、教団と俗界、教団と学校を結ぶ重要な役割を果たしていることについては、依然として変わりはないのである。Dek wat に対する伝統的な教育権を近代教育にゆずった寺が、寺内部の生活に精通し、仏教倫理の影響を受けた少年 (dek wat) たちを毎年多教育している

\* 筆者は、1970年10月から1971年2月まで、文部省の海外学術調査資金を得て、同僚4人とタイ国中部の農村について教育人類学調査をおこなったが、本研究ノートはその折採集した資料の一部を整理したものである。タイ国滞在中、京大東南アジア研究センターのバンコク事務所(当時三谷恭之氏在住)に何かとお世話になったことを記し、ここに改めて謝意を表したい。

\*\* 九州大学比較教育文化研究施設

この意味は大きい。

Dek wat の数は雨季や乾季によって増減し、寺の規模によって、あるいは寺が田舎にあるか、都会にあるかによっても異なっているが、一般には、当該寺の bhikkhu や nen (見習僧) を合わせた数よりは多少多いものと思われる。農村の寺では、dek wat の数は僧の数に等しいかやや多い程度であるが、バンコクのような大都市の規模の大きな寺では、地方から就学や就職を目的としてきた少年を中心とした、僧の数よりはるかに多い dek wat が居住している。たとえば、筆者の調査したバンケム部落の Wat Po では、10月には21人の僧に対して9人の dek wat が居住していた。しかし、タイ国最高の格式をもつバンコクの Wat Po では、同年12月をみると、bhikkhu 160人、nen 40人に対して、登録されている (バンコクの dek wat は郡役所に登録しなければならない) dek wat は1,000人をこえている。登録している dek wat のうち、かなりの数のものが、学業や就職の関係で Wat Po の僧房以外に滞在しているが、実際に居住している dek wat のみをとっても、600人に近い。カオ・パンサー (雨季入り) には、バンコクの Wat Po では、70人から100人にのぼる官吏や軍人などが臨時に出家してくるので、bhikkhu の数は倍近くふくれあがるが、新しい出家者はそれぞれ新しい dek wat を同伴することが多いために、dek wat の数も増加することになる。したがって、雨季には、カナとよばれる一つの小区 (1カナは普通 bhikkhu 4人、nen 2人からなっている) に dek wat が10人以上もいるようなことが生じるといえる。このように、一年を通じて時期的に増減はあるにしても、タイの dek wat 組織は、寺院内の生活に組みこまれた伝統として固定してきており、タイの男子に、サンガ内部の生活にふれる最初のきっかけを与えているといえる。タイ全国の寺の数は約2万4千6百、僧の数は約28万 (1967年現在) をこえているからこの数から推定すれば、少なくとも30~40万のタイの少年たちが、サンガ体系に最も近いところで僧と起居をともにしていることになる。僧とともに寺に滞在することによって、dek wat たちが陰に陽に仏教的知識やモラルを体得している意味は大きいといわざるをえない。しかしこうしたタイの小学校適齢期の男子の中で、いわば特殊なグループをつくっている dek wat についての具体的調査は、これまでのところほとんどなされていないといってよい。バンケム村には、筆者が調査した当時、部落2にある Wat Po に18人、部落4にある Wat Kud に19人、部落1にある Wat Mai Ban Kruoi に5人の dek wat が居住していた。

本研究ノートは、バンケム村の調査の一項目として筆者がおこなった上記 dek wat についての調査資料の一部を整理し、寺、dek wat、学校3者の関係を考えてみたものである。全体としては不備な点が多いが、村落レベルでの寺や教育を考える場合の資料として生の形で提出してみることにする。

## I バンケム村の概要

調査地バンケム村 (Tambon Ban Khem) は、中部タイのペップリ県カオヨイ郡にあり、バンコクよりバス道路を南にたどれば、ナコンパトムを経て約 140 km の地点、ラップリ市とペップリ市のちょうど中間に位置している。バス道路より東へ 1.5 km の村道をたどると、椰子の林の中に、バンケム村の集落が現われる。バンケム村は東西約 3 km, 南北 4 km で、カオヨイ郡にある11の Tambon のうち面積は最小である。湧水にめぐまれず、飲料水は雨水と池の水がもっぱら用いられている。

村は、バンケム 1 からバンケム 4 までの四つの部落 (muban) からなり、部落 1 は 179 戸、以下部落 2, 3, 4 がそれぞれ 160 戸, 46 戸, 275 戸の戸数をもっている。部落 2 と 4 にはそれぞれ歴史の古い寺があり、さらに部落 1 に、2 年前から新しい寺が創られつつある。しかし、この新しい寺は、まだ正式にサンガ組織に登録されていない。

小学校は同じく部落 2 と部落 4 に 7 年制のものがあり、前者は 15 学級、443 名、後者は 18 学級 540 名の生徒が在籍している。ただし、学校区は Tambon レベルの行政区とは必ずしも一致しているわけではなく、バンケム村の小学校二つは、隣接の二つの Tambon をあわせて三つの Tambon にある九つの小学校の中の二つなのである。この学校区内では九つのどの小学校へ通うのも自由である。ただし上記九つの小学校内では、7 年制の小学校をもっているのはバンケム村の上記 2 校のみであり、他の七つの小学校はすべて 4 年制である。

バンケム村の住民の生業は 90% が稲作であるが、他に商業、炭焼、日雇労働者などがある。特に、部落 4 には、タラート (市場) を中心に商人が多く、そのほとんどは華僑の子孫である。また、カオヨイ郡には、Lao Puan, Lao Vieng, Karien, Thai Dam, Lao So などと呼ばれる 5 種のマイノリティー集団がいるが、バンケム村にはごく少数の Thai Dam (黒タイ族) が住んでいる以外、住民のほとんどが中部タイを中心とするいわゆるシャム族である。

## II Dek Wat の生活

Dek wat の 1 日は、朝 6 時の起床で始まる。いっせいに起きてきた dek wat と nen たちは、まだうす暗い僧房の端の洗面所で、かなり急いで洗面をすます。洗面が終わると、dek wat たちは各々ピントゥ (托鉢用の容器) をもって、定められた家へと急ぐ。村道はまだうす暗く、犬に吠えられることもある。同じく托鉢に向かう bhikkhu や nen と方角が同じなら同道し、帰途も一緒になることが多い。しかし、一緒にゆくのは、たまたま方向が同じだからであるにすぎない。Dek wat の訪問を受ける家では、主婦がすでに料理をしながら待ちうけており、dek wat は多少待たされたあと、ピントゥへ食物を入れてもらい、同じく進呈された大きなパパイヤの実などを小わきに抱えて寺へ戻る。Dek wat たちは手分けして、持ち帰

ったピントゥを揃え、bhikkhu のために朝食を整え、bhikkhu の水浴場のカメに水を満たし、寺の掃除をする。このあと学校の制服に着換えてから、bhikkhu の食事終了後残された食物を皆で揃って食べる。食事がすむと、食器を寺の裏の田の水で洗い、8時半から8時45分にかけて近くの小学校へゆく。校長の話では、寺の雑事のため、dek wat の中には遅刻するものが多いという。

Dek wat は、昼食を学校へもってゆくことが多いが、寺へ戻って食事をすることもある。寺の bhikkhu たちは、昼間は dek wat がいないので、11時30分になると昼食の用意を自分たちですが、日によっては、dek wat が学校から戻って手伝うこともある。この場合、dek wat は bhikkhu の使用した食器を洗ってから学校へ戻るのである。

3時30分、学校がひけると、dek wat たちは寺へ戻る。空になっている水浴室のカメに再び水を満たし、寺院内の清掃をする。この時間帯には、dek wat たちも少しは遊ぶ余裕があるようである。5時に dek wat は全員集まって、僧房の板の上で車座になり、夕食をすませ食器を洗う。Bhikkhu はもちろん夕食をとらないが、bhikkhu から湯を所望されれば、dek wat がわかつて持ってゆく。5時30分にお祈りをする。このあと、大部分の dek wat は就寝まで自由時間となるが、当番の dek wat は僧侶長のところへ行って按摩をする。この時、僧侶長は dek wat にパーリ語の一節をよませてみたり、いろいろな質問をしたり、また学校で習った教科書をよませたりする。そして早ければ8時、おそくとも9時には全 dek wat は床に入る。

既述のように、バンケム部落2の Wat Po の dek wat は、雨季の間は20人をこえる数になり、乾季の少ないときには10人前後に減っていた。このうち3人ほどの dek wat が寺院内のわれわれの宿舎へよく遊びにくるようになり、一緒に食事をしたり、泊っていたりしていたところを見ると、そうした点について、dek wat に対し寺のほうで特に厳しい規制があるわけではないらしい。朝6時の起床にしても、彼らが泊った翌朝には、必ずわれわれの中の誰かが起こさないと何時までも寝ている点は、他の子供と特に変わったところもない。寺でも dek wat は bhikkhu に起こされているようである。しかし、声をかけると飛び起きて出てゆくこと、夜われわれが横になっていると、すぐ按摩をしようとしたり、指のツメを切ろうと申し出るところなどをみると、やはり他の子供たちとちがっているといえる。

Bhikkhu は、バンケム村内はもちろん、近隣の村々から、冠婚葬祭に際し頻繁に招かれており、かなり多忙であるが、学校のない日にそうした祭事に出席する場合は、必ず dek wat をお伴に連れてゆく。また新年の祭儀やソクラン祭、ロイ・クラトン祭などに際し、dek wat は僧の手足となって働くわけで、きわめて多忙である。Dek wat はサンガの一員ではないから、必要とあれば僧のために料理をすることもできる。そうした意味で、現在、dek wat なしの bhikkhu の生活を考えることはできないのである。

### III Dek Wat の 属 性

#### 1. 家 庭 環 境

子供を dek wat にする家庭は、一般に貧乏であったり、片親であったり、子供が多かったりする。また、自宅からの通学距離が長いため、学校の近くの寺へ dek wat としてあずけて通学させたりする場合が多いといわれる。表1から表3までをみると Wat Po, Wat Kud, Wat Mai Ban Kruoi の3寺の dek wat に関する限り必ずしもこうした傾向をよみとることはできないようである。ただし、bhikkhu の中にも長期間寺に“職業的”にいる bhikkhu と、雨季の間のみ短期間出家しているものがあるように、dek wat の中にも、長期間その寺を住居にして通学しているものと、短期間の出家者について短期間 dek wat になり、出家者が還俗するとき一緒に寺を出るものがあり、このような短期間滞在の dek wat をのぞいて分析すると、やはり家が学校から遠い子供やきょうだいの多い家庭の出身者が多いようである。ただ、以上の表では、調査時期の関係でこの面の特色が鋭角的には出ていない。出身村については後に言及するが、片親の dek wat は雨季の統計からみても Wat Po の場合5分の1、Wat Mai Ban Kruoi でやはり5分の1となっている。きょうだいの数は平均5～6人であり、タイ農村

表1 Dek Wat の親の職業

	農 業	商 業	果樹栽培	大 工	教 師	炭の販売	不 明	計
Wat Po	9	3	2				4	18
Wat Kud	8	6		1	1	2	1	19
Wat M. B. K.	5							5
計	22	9	2	1	1	2	5	42

表2 両親の有無

	両 親	片 親	不 明	計
Wat Po	12	3	3	18
Wat Kud	17	1	1	19
Wat M. B. K.	4	1		5
計	33	5	4	42

表3 きょうだいの数

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	不明	計
Wat Po	1	1	2		1	3	4	4	2			18
Wat Kud				4	1	6	2	1	2		3	19
Wat M. B. K.				1		1	2			1		5
計	1	1	2	5	2	10	8	5	4	1	3	42

では必ずしも多い子供の数とはいえないが、たとえば Wat Po の場合、件数として最も多いのは6人きょうだいの4事例、7人きょうだいの2事例、8人きょうだいの2事例である。親の職業については、当然農業が多いが、予想以上に商業の割合が高いのが注目される。

### 2. 年齢と学年

Dek wat の年齢は、15才を上限、6才を下限とした範囲にあり、数としては総計42人の dek wat 中11才が10人で最も多く、次いで10才が6人、14才、13才、12才がそれぞれ5人いる。学年別にみると、中学1年 (Mathyom Suksa 1) が3人、小学校 (Prathom) の7年生が7人、6年生が4人、5年生が10人、4年生が8人などとなっており、小学校の1, 2年生は少ない。

したがって、dek wat は年齢的には11~14才、学年としては4年生から6年生にかけてが最も多いということになる。タイの農村地帯の小学生の場合、年齢と学年はかなりずれている場合が多く、バンケム村の場合も、普通、小学4年生は9才~10才なのだが、15才で4年生

表4 Dek Wat の年齢

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
Wat Po	1	1		2	3	4	2	2	3		18
Wat Kud		2	1		1	5	3	3	2	2	19
Wat M. B. K.			1	1	2	1					5
計	1	3	2	3	6	10	5	5	5	2	42

表5 学年別 Dek Wat 数

	P.1	P.2	P.3	P.4	P.5	P.6	P.7	M.S. 1	計
Wat Po	1		3	4	4	2	2	2	18
Wat Kud	3		1	2	5	2	5	1	19
Wat M. B. K.		1	1	2	1				5
計	4	1	5	8	10	4	7	3	42

という事例もみられた。Dek wat の寺滞在の長さをみると、Wat Kud の場合、最も長い dek wat が6年、最も短いものが2カ月である。一般の傾向としては、1~3カ月で村を去るものと、数年にわたって滞在するという二つの型があり、臨時出家者について寺へ入った dek wat と長期滞在の dek wat との対照が明瞭に出ている。

### 3. 出身地

Dek wat の出身地をみると、一般にそれぞれの wat が位置する部落からの出身者が多い傾向はあるが、必ずしも一番多いわけではなく、寺のない近隣の諸部落から来ている子供の割合もかなり高い。たとえば、Wat Po の場合は、バンケム2からは4人であるが、2 km 東の寺のないバンケム3から5人、北のチュムボン村から3人きている。Wat Kud の場合は、バス

表6 Dek Wat の出身地

	B. K. 1	B.K. 2	B. K. 3	B. K. 4	Chumphon	Bangkok	Ratchburi	その他	計
Wat Po	1	4	5	2	3			3	18
Wat Kud		2		7	4	1	2	3	19
Wat M. B. K.	4							1	5
計	5	6	5	9	7	1	2	7	42

道路をへだてて西側のチュムポン村からやはり4人来ている、チュムポンには別に寺があるわけだから、Wat Kud のあるバンケム4出身の dek wat 7人に対して4人来ているというのは、他村からの割合がかなり高いことを示している。また、Wat Kud の場合は、140 km はなれたバンコクや 30 km はなれたラップリ市からも dek wat がきている。Dek wat が遠方からくる理由は大きくわけて二つある。その一つは、寺のない部落に住む家族が、通学上の便を考えて男の子を寺へ出す場合であり、他の一つは、僧との親戚関係をたよって寺へ入る場合である。バンコクやラップリなどの遠方の都市からバンケム村の寺へ男の子を送りこんでいる場合は必ず dek wat の親がその寺の僧のうちのいずれかと親しかったり、親戚関係にあたりしている。また bhikkhu が養子として引きとっている場合も多い。バンコクの大きな寺院の dek wat が地方から来ている場合も、バンコクの寺にいる親戚の僧を頼っているか、僧を個人的に知っているか、紹介によっている。しかし、農村や地方の小都市からバンコクへ dek wat に出す場合の理由は、貧困や通学距離が問題なのではなく、バンコクの良い学校へ入れ、良い大学へ進学させるための手段としてであることが多く、したがって、後者の場合は両親は必ずしも貧乏なのではない。

#### 4. 僧との関係

僧と dek wat の関係は、表7のように、数の上では他人であることが一番多い。しかし、関係不明の3人を除いた39人の dek wat 中半分に近い18人が、何らかの意味で bhikkhu と

表7 Dek Wat と僧との関係

	他人	兄弟	甥	養子	親戚	不明	計
Wat Po	7		4		5	3	18
Wat Kud	10	2	3	1	2		19
Wat M. B. K.	4				1		5
計	21	2	7	1	8	3	42

縁つづきであることは注目すべきであろう。一般に、20才すぎのタイの男子が雨季の間に短期間出家する場合、弟の中に適齢期のものがいれば弟を、最も普通には甥を dek wat として同道する傾向がある。短期間兄や叔（伯）父について dek wat になる男の子の親は、それを名

誉なこととし、大きな功德のひとつと考える。この場合、dek wat は、出家者が籍をおく寺の近くの学校へ臨時に転校することもある。このように短期間の出家者について dek wat となった男の子は、出家者が数週間または数カ月後に還俗する場合に、同じく dek wat であることをやめるのである。筆者のバンケム村における調査は、乾季の10月から1月にかけてであり、上述のような短期間滞在の出家者や dek wat が、ほとんど寺を去った時点と考えられるから、雨季の短期間出家者の多い時期をえらんだ調査であれば、僧と dek wat の関係には、より多くの親戚関係がみられたものと推定される。

#### IV 総 括

以上、Wat Po, Wat Kud および Wat Mai Ban Kruoi の dek wat について、若干の分析を試みてきたが、上記資料と筆者の聞きとり調査の結果に関する限り、次のようなことがいえるだろう。

Dek wat の家庭環境についてみると、親の職業に関しては特にあるものに片寄っているということはなく、農村としてはむしろ農業の比重の少なさが目立つ。片親の家庭も予想よりは多くない。ただどちらかといえば、子供の数が多くて貧しい家庭が男の子を dek wat へ出す傾向はあるように思われる。

Dek wat の年齢は10才～14才つまり小学校3年から7年生までの男の子が多い。また出身地をみると、小学校から遠い家庭の子が dek wat になる傾向がある。

僧と dek wat との関係は、事例としては他人である場合が最も多いが、兄弟関係、叔父一甥関係を中心とした親戚関係が半ばを占めることが注目される。僧との関係が他人である場合でも、母親が個人的に僧を知っていて頼みこむ事例がほとんどである。この場合、父親が僧に息子をたのむという形が少ないのは面白い。いずれにしても、僧と dek wat の関係は、親戚でない場合でも、友人・知人関係などを媒介としているのである。僧が村人の冠婚葬祭に招かれる頻度をもても、親戚や友人関係を通してであることが多い。自分の親戚や知人・友人である bhikkhu のみを招待することはよくないこととされているが、現実にはこの関係がドミナントであり、同じことが bhikkhu と dek wat の関係にもみられる。

Dek wat は、タイの仏教が現在のサンガ体系を維持してゆくのではなくてはならぬ位置を占めているが、問題点がないわけではない。僧の立場からいうと、近代学校教育体系が導入される以前においては、dek wat にとって寺は読み書きの手ほどきを受ける唯一の場であり、ここから締め出されることは、まともな大人になる道を塞がれるにも等しい重みをもっていった。したがって僧のほうでも厳しいしつけと教育を dek wat に課すことが可能であった。しかし、Wat Po の bhikkhu たちの語るところによると、最近の dek wat は、しつけを厳しくするとすぐやめてしまうという。読み書き算数などは学校で学ぶことができるわけで、bhikkhu が



dek wat に与える影響力、権威といったものに昔日の面影はないといえるようである。

親の立場からみると、筆者の聞きとった意見の中には、仏教によほど熱心でない限り、子供を dek wat にはしたくないというものがかなりあった。子供を朝早くから働かなくてはならぬ dek wat にするのは可愛そうだし、おもうように子供に会えぬのも困るという意見をもつ親が多かったようである。

それでは dek wat 自身は彼らの生活をどう思っているのでしょうか。筆者の聞いた限りでは、dek wat たちは寺での生活をそういやがってはいない。しかし、それではこのまま寺に残り、nen となり bhikkhu になりたいかという質問に対しては、ほとんどの dek wat が否定的であった。42人の dek wat 中将来 bhikkhu になりたいと答えたものは2人にすぎない。その理由としては、bhikkhu では自由に遊べないからというものが一番多かった。遊び盛りの小学校年齢期の児童の答であるから、これをそのまま小乗仏教に対する態度などと考えるのは早計であるが、“遊べない”という答の中に、彼らの僧侶観がはっきり出ていて興味深い。

しかし、最初にふれたように、何十万というタイの男の子たちが、dek wat として数カ月から数年を寺で過ごすことを通して、教団の生活にじかに触れること、僧と生活をともにすることの意味はやはり大きいといわねばならない。

現在、タイ国の地方の官吏、たとえばナイ・アンプー（郡長）や陸軍、空軍などの将官級の人々の中には、dek wat の経験者がかなり多いといわれる。筆者の調査したカオヨイ郡のナイ・アンプー（郡長）は、熱心な仏教徒であったが、同時にバラモン関係の祭事にもきわめて詳しかった。その理由は、孤児であった彼が、バンコクのある高僧の養子となり、dek wat として過ごした間に、自然に習得したためであるという。既述のように、バンコクの Wat Po の僧房には数百人の dek wat が起居し、200人を越える学生が、ここから大学へ通っているという。バンコクに適当な手がかりをもたない地方在住の人々が、手づるを通して男の子を Wat Po の僧の dek wat として送りこみ、食住をここで充足させるとともに、良い学校へ通わせるというひとつの型が出来上がっているようである。男の子を都会へ送る親の身になってみれば、大学や高校の寮や民間の下宿よりも、格式の高い寺院の僧房で bhikkhu の監督の下に自分の子供を生活させることは、はるかにのぞましいことにちがいないのである。

バンケム村の dek wat たちが、僧をたすけながら同時に通学のために寺を利用しているように、バンコクの寺院の dek wat たちは、托鉢では足りない bhikkhu や nen の食糧を買い入れ、炊事をし、掃除その他の俗事をたすけるが、寺を食住の保障された信頼のできる寄宿舎として利用している面を見落としてはならない。

タイ国における寺、dek wat、学校のことを体系的に考察することは、タイの教育についての興味深い一側面を明らかにすることになるだろう。